

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：14601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K02665

研究課題名(和文) 小学校における学級集団の状態に適合した授業モデルの開発

研究課題名(英文) Development of a teaching model adapted to the state of classroom groups in elementary school

研究代表者

粕谷 貴志 (KASUYA, Takashi)

奈良教育大学・教職開発講座・教授

研究者番号：10405079

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、小学校における学級集団の状態に応じた授業モデルの作成を試み、妥当性と実用性を検討した。授業モデルは、授業構成と指導行動から構成され、集団の状態に対応する方略であると同時に集団の規律と関係性を育成する実践につながるものであることが明らかになった。授業モデルを使った授業者との授業検討において一定の妥当性と実用性を確認することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、近年の児童生徒の現状に応じた集団の状態別に、必要な授業構成と授業における指導行動を明示化した。このことは、近年の児童生徒の現状や学級集団の実態に応じて無意識におこなわれていると考えられる授業技術を意識化することにつながるものであり、児童生徒の実態に応じて必要とされる授業の技術を教師間で共有するための視点になると同時に、近年の児童生徒の実態を踏まえた授業研究の新たな基盤を提供することにつながると思われる。

研究成果の概要(英文)：In this study, we attempted to create a teaching model adapted to the status of classroom groups in elementary schools, and examined its validity and practicality. The model consisted of a class structure and instructional behavior, and it was found to be a strategy that responds to the status of the group's condition, as well as a practice that fosters discipline and relationships in the classroom group. The validity and practicality of the model were confirmed in discussions about class with teacher.

研究分野：学校心理学

キーワード：学級集団 授業構成 指導行動 集団状態

1. 研究開始当初の背景

「学級がうまく機能しない状態」(学級経営研究会：国立教育研究所、1999)である授業不成立や学級崩壊の問題は、相変わらず大きな教育課題である。授業不成立の状態に至る要因として、学級集団の状態と授業における授業構成、授業における指導行動のミスマッチが指摘されている(河村・粕谷、2004)。

近年の児童生徒における現状と課題として、ア)自制心や規範意識の希薄化、イ)対人関係の形成の困難、ウ)学習や将来の生活に対する無気力や不安、などが指摘されており(文部科学省、2008) そのような児童生徒の実態のなかで、学級集団を単位として一斉授業を成立させる技術は変化を求められているといえる。

学級崩壊にいたる要因としては、学級集団のルール(規律)とリレーション(関係性)の低下がその要因として深く関わっていることが指摘されており、日々の授業において学級集団にルール(規律)とリレーション(関係性)を育てながら、安定的に授業を成立させることが求められる現状であると考えられる。

現在、多様な児童生徒の実態に対応して優れた授業を展開している教師は、集団の実態に応じた授業構成、指導行動をおこなっており、そのような授業において集団のルール(規律)とリレーション(関係性)に適合した授業構成と指導行動によって授業を成立させつつ、同時に集団のルール(規律)とリレーション(関係性)を育てる教育実践とは何かを明らかにし、近年の児童生徒の現状と課題の中で優れた授業をするための答えを見出すことが求められている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、小学校において授業不成立や学級崩壊を予防する授業構成及び、授業における指導行動のモデルを開発することであった。

授業は、教科や教材の特性、児童生徒の学習内容に関するレディネスなどによって、適合した授業構成がおこなわれている。しかし、同時に、児童生徒の現状と課題を踏まえると学級集団の状態に応じて適切に授業方法を選択することが求められている。

このような現状を踏まえ、本研究では、ア)授業における学級集団の状態別の授業構成と指導行動の抽出、イ)学級集団の状態に適合した授業構成と指導行動の検討、ウ)授業において集団育成をおこなう授業構成と指導行動のモデルの開発、の3つの項目について研究をおこなった。

具体的には、小学校を対象として、学級集団状態をルール(規律)とリレーション(関係性)から捉え、集団の状態によってどのような授業構成、指導行動が選択されているのか集団状態別にその特徴を解明する。その上で、それぞれの学級集団の状態に適合した有効な授業構成と、授業における指導行動モデルを開発することが目的であった。

3. 研究の方法

上記の目的にあげた3点について、次のような方法で実施した。

(1) 授業における学級集団の状態別の授業構成と指導行動の抽出

授業観察の承諾の得られた学級を対象として、集団状態を測定する心理尺度と学級担任への聴き取りを実施するとともに、授業における教師の指導行動の抽出を行った。集団の状態は、心理尺度結果と担任教師からの聴き取りと学級の観察の結果を統合し、学級の集団状況をルール(規律)とリレーション(関係性)の視点から把握した。その上で、授業記録資料を用いて授業で観察された教師の指導行動を抽出し、集団状態ごとにそれらを分類して特徴的な指導行動を見出す作業を行なった。

継続して観察が可能な学級を対象に、集団状態の変化と指導行動の変化を検討し、学級集団育成の段階による指導行動の変化について考慮にいたった検討を行なった。

(2) 学級集団の状態に適合した授業構成と指導行動の検討

抽出された授業構成と授業における指導行動について、教育心理学、教育学、教科教育学の視点から、その妥当性についての検討をおこなった。授業モデル生成に生かすために、それらの授業構成、指導行動が有効である理由及び、それらが有効にはたらくメカニズムについて、それぞれの研究領域から得られている知見との関連で考察をおこなった。

(3) 授業において集団育成をおこなう授業構成と指導行動のモデルの開発

分析対象とした学級について集団状態の特定をおこない、集団状態(ルールとリレーション)の変化と、授業構成と授業における指導行動の変化との関連を整理し、集団状態に応じて変化する授業構成と指導行動について分析した。得られたデータをもとに集団のルール(規律)とリレーション(関係性)の視点から、授業の中で集団育成を進めるもためのモデルを生成した。生成されたモデルは、その後も適宜修正を行った。

4. 研究成果

(1) 授業構成と指導行動の抽出

本研究では、集団のルール(規律)とリレーション(関係性)の状態に応じた授業構成とそれらの視点から集団を育成する指導行動を抽出した。その結果、集団の状態に応じた授業構成(「指示の明瞭性」「行動の習慣化」「役割交流」「活動の形態」「グループ規模」「自由度の調整」等)と集団の育成にかかわる指導行動(「不安緊張の低減」「参加への動機付け」「モデリングの活用」「かかわり方の教示」「行動へのフィードバック」等)に関する要因が見い出された。

加えて、発達障害や生育環境等に起因する課題がある児童への対応と考えられる授業構成、指導行動について、ルール(規律)とリレーション(関係性)の状態に対応した授業構成と指導行動と合わせて整理した。その結果、課題をもつ児童への個別の対応、類似の課題を抱える児童を含む周囲の児童への対応の2つの視点からの授業構成と指導行動の工夫が求められていることが明らかになった。

(2) 授業構成、指導行動の有効性の検討

本研究では、抽出された授業構成と指導行動の有効性について、背景となる理論および研究の知見から検討した。その結果、授業構成、指導行動については、たとえば自己決定理論、状況対応型リーダーシップ理論等の行動科学、教育学の理論や知見から了解可能であり、それらとの照合によってより適切な授業構成と指導行動についての示唆を得ることができた。また、学級に在籍する発達障害や生育環境等に起因する課題がある児童への対応については、発達障害の理解と対応についての研究および、心理社会的発達理論、愛着理論、ポリヴェーガル理論、トラウマインフォームドケアに関する知見等との照合により了解可能であり、それらの視点からの検討により有効な実践についての示唆が得られた。

これらの成果の一部は、学級集団のアセスメントの課題と支援についての話題提供(粕谷、2019)、集団状態に応じたグループアプローチを展開するための構成の工夫に関する書籍(「かかわりづくりワークショップ」(大谷・粕谷、2020))で公表した。

(3) 集団の状態に応じた授業構成と指導行動のモデル開発

集団状態に応じた授業構成と指導行動のモデルの生成

ルール(規律)とリレーション(関係性)の組み合わせで集団状態を7つに分類して基本となる授業モデルを作成した。その上で、集団発達の状況に応じて、ルール(規律)形成の促進と維持にかかわる指導行動と、リレーション(関係性)形成の促進と維持に関する授業構成と指導行動の内容を付け加えた。その後、発達障害、生育環境等に起因する課題をもつ児童への対応に関する内容を追加した。

授業者との協議による妥当性の検討

で作成したモデルを照合枠にして、実施された授業の授業構成と指導行動について授業者と協議をおこないモデルの妥当性を検討した。その結果、授業方略、指導方法の詳細については事例の状況によって異なるが、具体的な方略、指導方法の選択については概ねモデルと同様の考え方でおこなわれており、一定の妥当性と実用性があることを確認することができた。また、生成したモデルの精緻化のための示唆を得ることができた。

<引用文献>

- 河村茂雄・粕谷貴志(2004)授業スキル 中学校 図書文化
粕谷貴志(2019)学級アセスメントの課題と支援 教育心理学年報 58、312-313.
大谷哲弘・粕谷貴志(2020)かかわりづくりワークショップ 図書文化

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 藤原和政・川俣理恵・粕谷貴志	4. 巻 23
2. 論文標題 学級集団の状態とスクール・モラルとの関連：スクールエンゲージメントに注目した検討	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 学校カウンセリング研究	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 粕谷貴志
2. 発表標題 中学生の発達の課題と主体性，寛容さの育成
3. 学会等名 日本教育カウンセリング学会第17回研究発表大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 粕谷貴志
2. 発表標題 学級集団のアセスメントの課題と支援
3. 学会等名 日本教育心理学会 研究委員会企画シンポジウム
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 大谷哲弘、粕谷貴志	4. 発行年 2020年
2. 出版社 図書文化社	5. 総ページ数 176
3. 書名 かかわりづくりワークショップ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------